

自閉スペクトラム症児における 自学型ペアレント・トレーニングの効果

—スマートフォン用アプリケーションを介したプログラム—

神山努

（国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 ペアレント・トレーニング アプリケーション・プログラム

I. 目的

自閉スペクトラム症児とその保護者に対して、ペアレント・トレーニングの有効性が示されている。しかし、対面による双方向型の実施は、ペアレント・トレーニングへの参加を希望する保護者が、必ずしも参加できないことがある。そこで本研究は、自閉スペクトラム症児の保護者 1 名における、スマートフォン用アプリケーション（以下、アプリ）を介した自学型のペアレント・トレーニングの有効性を、保護者記録から評価した。

II. 方法

1. 参加者

A 児は自閉スペクトラム症が診断されている、4 歳 11 か月（DQ41）の幼児であった。要求の際に 1 語文程度の発話はみられ、思い通りにならない際にかんしゃくを起こすことがあった。B 児は未診断の、7 歳 5 か月の児童であった。こだわりや多動などから相談機関を利用していた。本研究の参加者からは、研究参加の同意を書面で得た。

2. 設定

子どもの標的行動に対する記録と指導は、家庭において保護者が行った。保護者は研究実施者と、月 1, 2 回 30 分程度の個別面接を行い、研究の進捗状況やアプリの使用について確認をした。

3. アプリの内容

アプリには 6 つの講義、標的行動を選定するためのシート、標的行動の記録シート、記録結果の振り返りのためのシート、記録結果のグラフが含まれていた。

4. 手続き

保護者は自らのスマートフォンにペアレント・トレーニングのアプリをインストールし、アプリを介して講義の閲覧、標的行動とその記録方法の選定、標的行動の記録、介入手続きの立案を行った。研究実施者と保護者との初回面接時に、保護者はアプリをインストールし、講義 1 と 2 の視聴後、アプリ内のシートを用いて標的行動とその記録方法を選定した。

以降は、保護者は家庭において、標的行動の記録、介入手続きの立案と実施、アプリでの講義視聴を行った。記録日数については、できるだけ多い方が好ましいが事情がある場合は無理に行わなくても構わないとした。アプリでの講義視聴については、2 週間に 1 度程度で順番に視聴すると良いが自分のペースで構わないとした。内容は以下の通りであった。

（1）講義 1：ペアレント・トレーニングとアプリについて説明した。

（2）講義 2：標的行動とその記録方法の選定について説明した。アプリ内の標的行動を選定するためのシートの記入方法、記録シートの作成方法についても説明した。

（3）講義 3：標的行動を起こりやすくする環境調整について説明した。介入手続きの記入欄は記録シート内に設けた。

（4）講義 4：標的行動への強化子の提示方法について説明した。

（5）講義 5：言語指示の方法について説明した。

（6）講義 6：グラフからの介入手続き修正の判断方法について説明した。

5. 結果の評価方法

保護者がアプリ内に記録した結果について分析した。

III. 結果及び考察

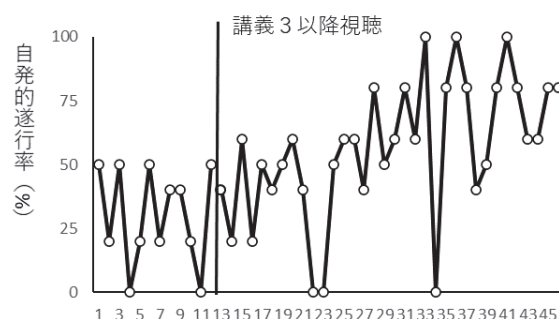


Fig.1 A 児の帰宅後手洗いの結果

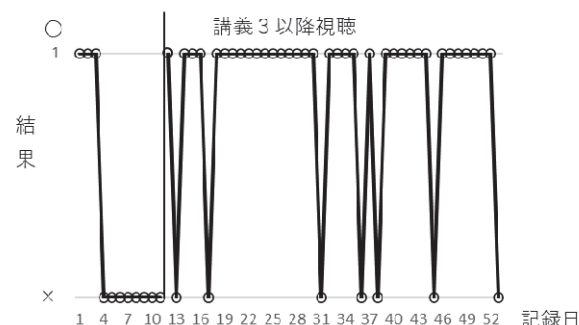


Fig.2 B 児のゲーム・タブレットの結果

A 児の標的行動（帰宅後の手洗い）の結果を Fig. 1、B 児の標的行動（夜 9 時までのゲームまたはタブレットの終了）の結果を Fig. 2 に示した。A 児の手洗いの自発的遂行率は、記録開始時は 0～50%であったが、保護者が講義 3 の視聴後、褒め方を変える、道具の配置を変更するなどを行い、100%の自発的遂行率の日も見られるようになった。B 児も当初は標的行動を達成できない日があったが、保護者が講義 3 の視聴後、アラームの設定、ご褒美の提示などするようになり、達成できる日が見られるようになった。

以上の結果から、本研究の参加者は、アプリを介した自学型のペアレント・トレーニングを通して、子どもの標的行動の変容に成功したことが示唆された。一方で、結果評価のために行った定期的な個別面接が、保護者のペアレント・トレーニング実施に影響した可能性があり、今後は個別面接がない条件で評価する必要がある。

(KAMIYAMA Tsutomu)